令和５年12月５日

浜田市議会議長　笹田　卓　　様

産業建設委員会委員長　川上　幾雄

委員派遣報告書

本委員会は、下記のとおり委員を派遣し、視察調査を終了したので報告します。

記

1　期間　　令和５年11月28日（火）

2　視察先及び調査項目

〇広島県安芸高田市

・「神楽門前湯治村」の経営と現状について

・「道の駅 三矢の里あきたかた」の経営について

3　精算額　一人当たり12,350円

4　派遣委員、同行者、事務局（合計８名）

委員　川上　幾雄、田畑　敬二、村木　勝也、大谷　学

小川　稔宏、佐々木豊治、牛尾　昭

事務局職員　大下　貴子

5　調査の概要（視察の内容等）

別紙のとおり

産業建設委員会 行政視察 報告書

① 神楽門前湯治村の経営と現状について

■日時　令和 5 年 11 月 28 日（火）10：00～11：00

■場所　「神楽門前湯治村」　広島県安芸高田市美土里町本郷 1462

■視察の目的（選定理由）

浜田市で計画がされていると思われる神楽館建設を踏まえ、開館して 25 年が経過している当施設を視察し、神楽館やその経営、そして問題点への認識を深めるため、建設当時の状況から現在の状況について現地確認・聞き取り調査を行う。

■視察先の概要

➢平成元年頃、竹下内閣 ふるさと創生事業で何ができるか。
　　資源の掘り起こし⇒住民の元気の源の『神楽』があるではないか

➢平成 4 年頃、神楽殿堂構想に着手。
　　町の年間予算にあたる事業計画となるがなかなか進まず

➢平成 8 年頃、偶然の温泉発掘により計画変更。（温泉・宿泊を含めた事業へ）

➢平成 10 年、 複合交遊施設 神楽門前湯治村 誕生

占有面積：5,465.87 ㎡

整備事業費：31 億円（内 7 億円は道路整備費）

施設概要：宿泊、物販、飲食、温泉を持つ複合レジャー施設

・天然温泉や格子づくりの旅籠や湯治宿。

・お土産屋にお食事処や茶屋など軒を連ねる。

・昔懐かしい雰囲気。

・神楽を鑑賞する神楽ドームがある。（1,500 人収容可能）

■視察の内容

≪取組、事業内容等≫

➢神楽の魅力発信、普及に取り組む

・安芸高田市 22 神楽団による公演や、地元美土里町 13 団体による共演大会

・金土日はいつでも神楽が観られる。（定期公演年間約 150 日公演）

・市内こども神楽団による共演大会 安芸高田こども神楽発表大会

・「地元産品」「神楽文化」「宿泊温泉」

➢近隣市町との連携強化を図る

・春夏秋冬特別公演

・ひろしまね神楽デー参加

➢国内外への展開

・関東、関西、九州圏への出張公演

・フランス、ブラジル、メキシコへの海外公演

➢地域住民との連携、協力

・地元食材の販売などは、地元の婦人たちが自分たちで考えた商品を持ち込み販売を行い好評を得た。

≪課題≫

➢観光資源としての神楽

・施設ではお金を払って観てもらっているが、神社やイベントなどでは『無料』で観ることができることの矛盾。

・いつでも観ることができる →『陳腐化』しないか。
神楽の価値向上の取組が必要。

➢地域・神楽団の協力が必須だが、人口減少による運営力の低下が懸念される。

➢老朽化を見据えた経営

・維持費修繕費を考慮する必要。物流・燃料コスト上昇を視野に入れた運営体制。

・採算性確保の困難。施設維持には継続的な支援が必要。

➢インバウンドの呼び込み

・広島市内には多くの外国人観光客が来ているが、こちらへはほとんど来ない。アクセスの悪さと、神楽の PR 不足と思う。

■質疑の内容

（質問）施設整備に至った経緯と建設を起案した所管課、及び建設費用と維持管理費、決算状況等について

（回答）当時の所管課は企画課、建設費用は 31 億円（内 7 億は道路整備費）
年間維持管理費は約 3 億円

（質問）今後の施設改修の見込みについて

（回答）公設民営なので、市の財源に大きく左右される。入湯税などを基金として積み立てしていたが、空調の修繕や更新などで使い果たした。温泉の

設備が壊滅的で何とか使用しているが、大規模な改修は考えていない。

（質問）湯治村施設に対する市民の反応について（建設当初と現在とがわかれば）

（回答）合併後、美土里町民はこの施設を大事に考えているが、その他の町民はそこまで関心ないと感じる。道の駅北の関宿をあわせて 5,000 万円の公費がないと賄えない施設は無くてもよいと考える人もいると思う。

（質問）来場者の推移について（湯治村全体、宿泊者、神楽鑑賞関係の割合等）
また、集客に対する手法について（広報の方法など）

（回答）開設当初からしばらくは 17 万人程度が随分続いた。コロナ禍で半減した。回復してきたとはいえ 7 割くらい。

（質問）年間の神楽上演回数と神楽団の関係について

（回答）昼神楽 66 回、夜神楽 76 回、他イベントなど年間 150 回程度。
年間行事予定を作成し、神楽団で振分してもらい対応している。

（質問）２つある神楽舞台の活用状況について

（回答）夏季は収容人数の多い神楽ドーム(2,000 人規模)を利用。
冬季はかむくら座（200 人規模）を利用。

（質問）現状における費用対効果について

（回答）年間 3,000 万円から 4,000 万円指定管理料がかかり、市費で対応。集客は 10 万人、約 3 億円の売上、雇用、取引で 2 億円の波及効果がある。

■各委員の所感

≪川上委員長≫

・当施設は、広域合併前の旧美土里町において多大の資金をもって設置されたものであり、当時はコストパフォーマンス的には良とみなされていたものの、今日においては負の面が大きくなっているように受け取れる。

・本施設は、「神楽の殿堂」として計画されたが着手には多くの問題を伴っていた。偶然の産物である「温泉（泉温 17 度程度)」により大きな計画変更（温泉を活用して湯治を前面に出し）で誕生。神楽上演、神楽の保存伝承、温泉、宿泊、物販を兼ね備えた大規模な施設としてスタートされたものであるが、時代の変遷や環境の変化、施設の老朽化などが運営に大きな影響を与え、現在で

は、物販施設に空きが目立ち、加えて温泉施設も泉質を原因とする管路閉塞等による閉鎖が多くなっているようである。
・今後については、温泉施設のメンテナンスが必要であることは施設管理者も言われているが、市全体の公共施設計画における位置づけや受益者負担の面からみて、公益的ではあるが選択的施設（民間譲渡、廃止）と捉えられ、市は新たな投資に踏み切れないようである。公益性を高めるためにも市内利用者が多くなる方策を見いだされることを期待する。
・以上から、浜田市において同様な神楽関連施設を計画するのであれば複合化を考慮すべきであり、加えて将来負担についても最大の配慮を要するのではなかろうか。

≪田畑副委員長≫
・時代の背景もあったのだろうが、過大・過剰な投資であったと感じた。
もし浜田市で整備されることになるのならば、できるだけ無駄を省き、過度な投資にならないよう将来負担も見据え、当初設計をしっかり行うべきと感じた。

≪村木委員≫
・ネットではあるが事前に調査して、この施設の他、観光施設において、成果連動型民間委託契約方式(PFS)に興味を持った。
・しかしながら、この契約における説明はなく、私から質問をした。
・神楽門前湯治村サイドとしては、この考え方は納得のいくものではなかった。
・合併前にできた施設を合併後において、その当時の意志を引き継ぐことの困難さが伝わった。
・思ったより、海外からの観光客が少なかった。
・施設の設置に起債や交付金を充てられても、維持費や改修費が困難であることを改めて痛感した。
・令和５年度の施政方針を見たところ、市としては神楽に力を入れていくことは見受けられた。
・随行の観光担当者にも、エクスポ 2025 に向けての取組を聞いたところである。
・今後は、最初に興味を持った「観光関連施設の一体管理に係る官民連携手法検討調査業務」の動向が見たい。

≪大谷委員≫

・年間約 150 回の公演を行っている「神楽ドーム」と「かむくら座」や宿泊施設や飲食施設や温泉入浴施設や神楽資料等を展示している文化施設をもつ複合交遊施設である。コロナ中の令和 4 年でも年間 93,510 人の利用で約 2 億円の売上高であった。偶然の温泉発掘により複合施設へと計画変更したとのことであったが、入湯・宿泊・宴会・飲食・物販の各部門の売上は神楽・文化・イベント部門を含めた全体の 83%であることから当初の「神楽の殿堂」構想だけでは経営的には破綻していただろうと感じた。

・令和 4 年の年間利用者数は文化部門 1,309 人、神楽公演部門 16,591 人で全体に対する率がそれぞれ 1.4%と 17.7%であった。他の部門と比較すれば少ない数字ではあるが、文化的資産は文化財保護法でも規定され地域の宝として保存継承すべきものであるので、必要な経費として市民の理解を得つつ神楽伝承文化施設として捉えるべきものと感じた。

・開業より 25 年が経過し施設の老朽化により維持費や修繕費の捻出が課題とのことであった。小さな修繕をこまめに行うことによって大規模修繕経費の抑制をする。新築時においては割り増しになってでも後々の維持コストを軽減できるように予め設計してトータルな経費は少なくなるようにする。等々、短期的の視点ではなく中長期的視点に立った予算措置になるように思慮すべきと感じた。

・宿泊施設では地物に拘った食材の提供に心掛けているとのことであった。これは全国的な動きでもあり利用者はオリジナリティや限定品など高付加価値なものを求める傾向にある。美又や旭の温泉宿泊施設でも同様な取組であってほしいと感じた。

≪小川委員≫

・当初の神楽殿堂構想のみの整備では難しかったが、偶然、温泉が発掘されたことで複合施設としたことで実現できたものと思われる。しかし約 25 年が経過するなか懐かしさを醸す木造建物や温泉設備の配管等の老朽化も進み、改修費用の確保が課題といわれていた。合併前の旧美土里町時代に整備された施設で旧町民にとっては愛着もあり大切にされている施設ではあるが、維持管理では合併後の安芸高田市民の合意形成をいかに図れるかが問われている。

・神楽文化の保存継承と観光資源としての活用というテーマは近隣市町とも競合しており、ライバルも現存する。浜田市の神楽伝承施設の検討においては特色と魅力ある施設は必須条件であり、難易度はかなり高いものと思われる。ま

た、将来にわたって維持するためにも先行施設の維持管理の課題を参考に運営形態、維持管理体制も充分検討し費用負担も含め市民の理解が得られる施設整備が求められる。

≪佐々木委員≫

・「何も無い町」と言われながら、唯一あった神楽を町の将来のためにいかに活かしていくのか、町の将来を考え、町民の意識を高めながら大きな事業に取組まれたことに驚くとともに敬意を表するものであった。
・しかし、合併後、他の 4 町との意識のずれは残念ながら埋めようがないものと感じた。
・25 年経った今、施設があまりにも大がかりでもあるため、今後の改修費も見込めないなかで、今後の維持の難しさも感じた。
・一般的に市が抱える施設をいかに減らしていくかが大きな課題となっている中、指定管理料 5000 万円の施設は維持していくには重たいものと推測する。

≪牛尾委員≫

・築後 25 年経過していて、大規模修繕が想定されるが、改修工事は未確定である。
・冷泉のために加熱費がかかり、昨今の状況は厳しい。温泉施設があってこその入込客で、単独事業では成り立たないと思う。
・初期投資が 32 億円前後かかっており、建て替えとなると合併後の新市の市民の理解が難しいと思われる。
・指定管理料の 5 千万円の維持が厳しくなると思う。

入り口から神楽ドームへの通り

かむくら座の中

説明を受ける様子

神楽ドームの中

神楽ドーム前

② 道の駅 三矢の里あきたかたの経営について

■日時　令和 5 年 11 月 28 日（火）13：00～14：00

■場所　「道の駅 三矢の里あきたかた」　広島県安芸高田市吉田町山手 1059-1

■視察の目的（選定理由）

浜田市の観光の拠点となる「道の駅 ゆうひパーク浜田」が魅力ある施設となり、多くの人に利用してもらえるように、他地域で集客に成功している道の駅を視察し、浜田市の道の駅に取り込める部分がないかノウハウを学ぶため、人口規模は当市より小さく山間地であるが、賑わいを見せている当道の駅を選定した。

■視察先の概要

一般国道 54 号線沿いにある道の駅、令和 2 年 6 月 1 日開業
敷地面積：12,962 ㎡　建築面積　(市)2409.04 ㎡(国)418.64 ㎡
整備年度：平成 27 年度～令和元年度（2015 年度～2019 年度）
整備事業費：22,7 億円（市 12,1 億円 国 10,8 億円）
施設概要：駐車場 84 台（大型 18 台 小型車 64 台 身障者用 2 台内 EV 電器 1 台）
公衆トイレ：22 器：男性(大 3、小 5)器、女性 13 器、身障者用 1 器、ｵｽﾄﾒｲﾄ 3 器
施　　設：地域振興施設（産直市、レストラン、多目的広場、多目的室）
休憩情報発信施設（休憩、情報、ｲﾝﾌｫﾒｰｼｮﾝ、ｷｯｽﾞｺｰﾅｰ）
非常用電源、貯水タンク
特　　色：・野菜をテーマとしたフードパークの産直市
・ノーバック駐車場の整備
・地元食材にこだわったレストランやベーカリー
・利用者や近隣住民の緊急避難場所機能と大規模災害の中継拠点基地
・市内を周遊する動機付けを行うタイムリーな魅力・情報発信

■視察の内容（視察先の取組、事業内容等）

➢整備の目的

・地域の活性化：積極的な情報発信により人を呼び込み、新たな賑わいの場を創出し、産業や観光の振興を図ることで物流や交流人口の拡大につなげ、市内全体の活性化を図る。
・観光施設の連携：多くの観光資源が散在しているが、集客につながっていない

という課題があり、観光資源相互のネットワークの強化の推進、受入体制の整備で魅力ある周遊・着地型観光の充実を目指している。

・観光振興の拠点：観光、歴史文化、農業の地域資源を結節する役割を果たし、「観光周遊促進拠点」として交流人口の拡大を期待している。

➢整備のコンセプト

・市の持つ地域資源に目を向け、5つの拠点機能を果たすことができる。

① 産業の活性化や雇用の確保による産業振興拠点

② 利用者から愛され親しまれる交流拠点

③ 地域文化や道路交通・災害時の情報発信拠点

④ 次世代へとつながるまちづくりの拠点

⑤ 災害時の地域防災拠点

■質疑の内容

（質問）施設整備にかかった費用や維持管理費、売り上げや集客数、決算状況等について

（回答）施設整備費 22.7億 、公設民営、第三セクター

（質問）地元産品の出店状況、地元利用の割合は

（回答）契約農家 1,300戸、60％～70％地元産、約30％は他地域からの仕入れ利用者は市外県外が7割、市民利用は2～3割程度と少ない。

（質問）集客に対する手法について（広報の方法など）

（回答）イベントなどはSNSなどを活用し案内している。いつ来ても面白いと思ってもらえるイベントの計画を心がけている。

（質問）販売に関して、展示やポップなどで工夫されていることについて

（回答）職員の手作りのポップ。野菜の山積みや特長紹介。入り口付近に売りたい商品を陳列して目に付くよう工夫している。

（質問）ベジキャラなどは運営開始時には作ってあったのか、それとも運営開始後に公募等で作られたのか

（回答）主要品目8種類の野菜をモチーフとして、道の駅の運営前にシンボルとして作られていた。

（質問）キャラクターを使用することによる効果について

（回答）売場を楽しくさせる役割をしている。また自販機にも活用して地元野菜をアピールしている。イベントなどでも活用しているが、包装紙などもテナントでできるだけ使用したい。

（質問）今後、出店を予定している企業などについて

（回答）「良品計画」が駄目になったので今のところは無い。

■各委員の所感

≪川上委員長≫

・第三セクターとして設置３年を経過したところであり、地元野菜の直売、大規模な食堂、土産物の販売、観光に関する紹介、衛生的で見た目も美しいトイレ、ノーバックを採用しスムーズ出入りが可能な駐車場など、利用者に配慮された施設であり多くの立ち寄り客を生み出しているものと受け止めた。

・多くの立ち寄り客がありながらも、駅長や多くの職員から笑顔と優しい言葉が生まれている状況は好感を受けた。

・管理者から指定管理料が無いと運営ができない状態であるとの説明を聞くにつけ、集客のため「良品計画」の出店が頓挫したことの影響が今後大きくなるのではないかと思慮するところである。

・浜田の道の駅とは設置状況等に大差があるが、利用者目線での施設運営が大事であり、職員の接客態度から見直す必要があるように感じた。

≪田畑副委員長≫

・JA の野菜売り場は、陳列をはじめ買い物がしやすい広さでとてもよかった

・品揃えもよく、また現場職員は皆笑顔で対応しており、少しでも困っていると声掛けをしてくるなどの配慮が気持ちよかった（お客をよく見ている）。

・駅長自らが店舗前でお客の誘導を行うなど、気遣い・目配りがよくできていると感じた。

・浜田の道の駅でもお金をかけずにできる取り組みであると感じた。

≪村木委員≫

・まずは、正規職員が３名での事業展開におどろいた。

・やはり、農協との連携が重要である。

・当然かもしれないが、市民から愛される、利用される施設を目指しているところに感銘した。
・施設のコンセプトがはっきりしており、誘客の取組も戦略的であった。
・神楽門前湯治村もそうであったが、市の職員が派遣条例により派遣されていることに、市の関わりが見える。
・現在、個人的に「三隅氏発祥 800 年の会」の活動しているが、当施設においても「三本の矢」を「市民・企業・行政」としての活動(コンセプト)としており、歴史を入口とする施策はとても参考となった。

≪大谷委員≫

・駐車場を囲むように産直棟・レストラン棟・体験情報発信棟・トイレ棟が配置され、初めての利用者であっても車で駐車場に侵入したときに大体の施設配置を確認できる安心感がある。
これに対しゆうひパーク浜田は各機能が西端に集まっているので駐車場から施設配置を読み取ることが難しい。しかも、直ぐに利用したいトイレの場所はわかりにくい西奥側にある。今更施設配置を変えることは困難なので各施設の位置を予め認識できるような施設平面図を駐車場に設置して利用者の戸惑いを軽減する必要性を感じる。
今後の改善策を検討するためにもゆうひパーク浜田が、そもそもどのようなコンセプトで現在のような施設配置としたのか整備計画を把握しておく必要性を感じる。
・広島県内の道の駅で一番広い売り場面積（約 720 ㎡）の産直棟は、旬の野菜やキノコなどの里山の産品の他に精肉・鮮魚・総菜・お土産品等々の品揃いで、市内外に関わらず新鮮な地物をチョットお安く買えるお得感があり消費者ニーズをよく捉えていた。浜田においても利用促進のためには新鮮産品を取り扱う産直売り場は欠かせないと感じた。
・産直売場に登録する農家は約 1,300 人で市民のやりがい創出にもなっているとのことであった。浜田においても浜田全域に係わる取組として位置づけ更なる投資をしてでも売る場の充実は欠かせないと感じた。
・市内外からの「道の駅立ち寄り率の向上による地域経済へ寄与」などと意識の高い駅長他職員の熱意が成果の源であると感じ取れる視察であった。

≪小川委員≫

・2020 年 6 月にオープンした新しい道の駅で、様々な機能が備わっていた。

・JA が運営する産直市「ベジパーク安芸高田」が隣接しており JA との連携は強みといえる。集荷登録農家は 1,300 人で 700～750 人が常時出荷し地元農産物の売り上げにつながっている。
・従業員 50 人のうち 8 割が地元雇用で地域維持にも貢献している。
・視察当日は平日で地元食材を使ったレストランは比較的空いていたが、休日は満席で入れない程の盛況ぶりと聞いた。隣の高級食パン店の食パンを目当に立ち寄る客も多い人気商品となっている。
・観光面では毛利元就のふるさとを意識した情報発信も行われている。
・太陽光と自家用消費型蓄電池システムの導入をはじめ防災関連設備も整備されており、災害時の避難場所、中継拠点基地の機能が備わっている。
・イベント、キッチンカー、SNS 発信など集客のための企画は職員がしているとのことであった。レストランの客単価が 1,200 円から 1,300 円というのも好印象を受けた。ゆうひパーク浜田と単純比較はできないが参考にすべき点は多いと感じた。

≪佐々木委員≫
・元々が地元の産直市としての施設。道の駅に移行しても地域から多くの出品があり、地域の星印的な施設と感じる。
・駅長をはじめ、職員の工夫で集客売り上げにつながっていると感じた。
・地元利用の拡大が課題とされていたが、宮島に来る外国人の誘致ができないかとも感じた。

≪牛尾委員≫
・開設 3 年の施設であるが、県内ナンバーワンの道の駅である。
・平均客単価は 1,300 円前後であり、市域が広いので上乗せは難しい。
・宣伝活動は、SNS や手作りのポップで経費の節約をしている。
・広島都市圏の市であり、広島市内からのさらなる誘客が求められる。
・全体の感想は、よくやっていると思う。出向の駅長の頑張りが読み取れた。

多目的室での説明を受ける様子

毛利元就三矢の絵の前